

子ども全員が参加できる授業の工夫

—一斉指導・個別指導を工夫して—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域

藤生 とも子

I サポーター実習から学んだ問題意識

1 授業参観から

私が愛知教育大学大学院に入学した理由は、学校サポーターとして学校現場で実習ができるということだった。昨年の10月から豊田市立高嶺小学校で週2回の実習や、1か月の実習を2回経験し、学部だけでは分からなかった学校の実態を学ぶことができた。

その中のひとつが教師自身の指導力の育成である。高嶺小の先生方は、校内での授業公開や現職教育など多くの時間を費やしてよりよい授業づくりを目指している方ばかりである。校内を歩くと学習の軌跡を表した掲示物や手作りの教材が溢れていて、子どもたちの知的好奇心を伸ばしている。私にとって、毎日が驚きと感動に満ちた実習だった。

しかし一方で、「子どもがついていけない」「授業が分からない」という意見が保護者アンケートに見られた。高嶺小のほとんどの先生方の授業を参観する機会に恵まれたが、どの先生方も大変興味深い授業を実践なさっている。恐らく、様々な理由で理解の難しい子どもたちが、授業に参加できずつらい思いをしているのではないだろうか。全員が参加する、理解できる授業とは何か、そのためにはどのような工夫が必要であるのかを考え、実践してみたいと考えた。

2 個別指導の経験から

学校サポーターでは、授業についていくことが困難な児童の取り出しや入り込みの指導を担当させて頂いた。思考がゆっくりであったり、文字を読むことが困難であったり、自分の気持ちを抑えられないなど、様々なケースの子どもたちと接してきた。子どもたちの気持ちにはある特徴があった。それは、分きたいという気持ちが人一倍強いということである。それがあからこそ、できないことに苛立ったり悲しんだりできる。そんな子どもたちに、出来たときの喜びを味わってもらいたいと思った。

また、授業中以外での課題もあった。授業についていけないということは、みんなと同じことができないということである。すると、徐々に周りから友達が減ってゆく。本人も、勉強ができないという引け目があるためか自分から友達の輪に入ろうとはしない。学年が上がるほどその傾向は強くなっていった。学級経営の視点から言えば、勉強の出来で敬遠するなど絶対にしてはいけないことである。しかし、学校サポーター

として私にできることは、周りの子どもたちと同じように理解できるよう支援することで、学級の友達と仲良く遊べるよう促すことではないだろうか。授業を理解できないことが学級での居場所がなくなることに繋がり、学習意欲が低下していく。その悪循環を断ち切りたいと考えた。

II 学び合いを促す授業づくり

「授業づくりの内容と方法Ⅰ」の講義で、未完成のものであっても部分肯定をすることによって子どもの意欲を高めることができることを学んだ。完成していないことよりも、現時点でできていることに着目して褒めることで、自己肯定感を育てたりさらに学習を進めていこうとする意欲に繋げたりできるというのはとても興味深いと思った。ただ、取り出し指導などで学習に困難を抱える子どもを見ていると、ワークシートなどに何も書けないことも多い。よって授業をする際には、一部分でもよいから必ず子どもたちが何か表現できるような活動を取り入れたいと思った。「できた」ことのよさを教師だけでなく子ども自身が認めることで、自分への自信を育て、学習意欲に繋げていきたいと考えた。

「問題行動対応論」の講義では、ディスレクシア協会の方から発達障がいの子どものための支援について学んだ。LDの子どもの文字の見え方や音の聞こえ方など、これまでの自分の経験では全く分からなかった実態を学ぶことができ、とても参考になった。その困難を軽減するための図や絵による支援は、実際に取り出し指導の中で行った時も大変効果があり、とても有難いと思うとともに自分の勉強不足を実感した。さらに学級の中では、そうした診断にあてはまらない子どもであっても、文字を読むのは困難であったり、指示や説明だけではなかなか伝わらなかつたりする子どももいる。その中で、言葉に加えて絵で内容を伝えることによって、文字を読むだけでは理解が困難であった子どもたちに分かりやすく伝えることができると考えた。

また、『学ぶ意欲の心理学』（市川伸一）を読み、仲間と楽しく学ぶことが意欲に繋がるということも学んだ。全体での発言がなかなか難しい子どもでも、小グループでの学習で教え合ったり意見を言ったりすることで参加意識を育てるのである。こうした学び合いの

環境を教師が整え、子どもたちが意欲的に授業に参加できる学習方法を考え、実践していきたいと思った。

学部を卒業後、教職大学院入学まで講師をしていた頃、学習内容が分からないとすぐに拗ねてしまい、なかなか授業に再び参加することができない子どもがいた。私が声をかけても毎回ということもあり、特に効果がない。そんな時、同じ班の子どもたちが「いっしょにやろうよ」と声をかけてくれた。私が声をかける時は徐々に戻っていく様子だったが、その時は、すぐに班に戻り学習を再開することができたのである。その経験から、教師と子どもだけでなく、子ども同士の関係も育てていくための授業づくりをしていくことの大切さを学んだ。

以上のことを生かして

手立て1) 自分の考えを説明したり、協力して学習をしたりする活動を取り入れること

手立て2) 誰もが取り組めるワークシートや学習活動を考えること

手立て3) 文字と絵を組み合わせることで内容を伝えること

をすることで、子ども全員が参加できる授業をつくろうと考え、実習校の3年生において実践した。

Ⅲ 教師力向上実習Ⅱでの実践

1 国語科での学び合いの活動

(1) 「木かげにごろり」の指導計画と実践のねらい

①単元の目標

- ・場面の様子がよく分かるように音読することができる。(読むこと)

- ・場面の移り変わりに注意して読むことができる。(読むこと)

- ・人物の気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。(読むこと)

- ・世界の民話に興味を持ち、進んで読んだり調べたりすることができる。(関心・意欲・態度)

②指導計画

この單元の中で学び合いとして取り入れたのは、ミニシアターづくりによる読み取りと子ども自身の読んだ民話を同じ班の子どもたちに紹介する学習である。

ミニシアターとは、私が講師をしていた頃の研修で学んだことであり、子どもたちが文章を図や絵で示し、その理由を説明することによってキーワードを明らかにしたり、子ども一人ひとりの読み取りを共有したりできるように考えられた指導方法である。私はこれに加え、発話がうまく出来なくとも絵や書き込みによって自分の言いたいことが部分的でも伝えられること、具体物があることによって全体の前で意見の言えない子どもたちにも学習の軌跡を目視できることをねらいとし、本單元に設定した。

また、子ども自身の読んだ民話を発表する活動では、子どもたちが相手に紹介したい本に関する自分の考えや思いを伝えたり、また、相手の考えを聞いたりすることの楽しさを実感してもらうことをねらいとした。さらには、子どもたちが自分で本を選んだり、他の民話に興味をもったりすることによって読書の幅を広げ、日本以外の国の文化や人々に関心をもってもらいたいと考え、本単元のまとめの活動とした。

時間	主な学習活動	評価基準
1	<p>「木かげにごろり」を読もう</p> <p>1 範読を聴きながら、分からない言葉を明らかにする。</p> <p>2 全文を音読し、話の感想を書く。</p>	<p>○言葉の意味や読み方を理解し、正しく音読することができる。</p> <p>○初発の感想をまとめ、隣同士で発表しあうことができる。</p>
2	<p>登場人物についてまとめよう</p> <p>1 登場する人物をまとめる。</p> <p>2 台詞や描写から、性格や立場の特徴をつかむ。</p>	<p>○主な登場人物を読みとり、発表することができる。</p> <p>○根拠を明らかにして百姓と地主それぞれの性格の特徴を読み取ることができる。</p>
3	<p>ミニシアターの方法を学ぼう</p>	
4	<p>1 人物の配置やかげなどの書き込み方を学ぶ。</p> <p>2 実際の民話を使って配置や書き込みをする。</p>	<p>○読みとりと配置や書き込みの仕方を理解し、実践することができる。</p> <p>○隣の席の子どもに自分の意見を伝え、協力しながらミニシアターの学習ができる。</p>
5	<p>地主とお百姓の関係を読み取ろう</p> <p>1 1の場面から、登場人物について書かれている文や言葉を読み取る。</p> <p>2 挿絵や文から、地主と百姓の立場の違いを読み取る。</p>	<p>○地主と百姓の性格や様子について説明している文を見つけ、その対照的な描かれ方に気づくことができる。</p> <p>○台詞や文、挿絵などから地主と百姓の身分的差異に気づき、序盤の登場人物の気持ちを考えることができる。</p>

6	<p>木かげを買い取った百姓たちの気持ちを考えよう</p> <p>1 2の場面から、木かげをめぐる地主と百姓たちのやりとりを読み取る。</p> <p>2 3の場面から、木かげが伸びている場所や、台詞などから、場面の移り変わりを考える。</p>	<p>○季節や労働状況から、木かげを買い取らざるを得なかった百姓たちの気持ちを読み取ることができる。</p> <p>○季節の移り変わりと木かげの関係に気づき、地主と百姓の関係が変わり始めていることを読み取ることができる。</p>
7	<p>木かげが地主の家まで伸びたときの登場人物の気持ちを考えよう</p> <p>1 秋になって伸びた木かげの場所や様子などを読みとり、図に表す。</p> <p>2 地主の家の中まで木かげが伸びたときの地主と百姓それぞれの気持ちについて、叙述を基に考える。</p>	<p>○2場面での木かげの取り決めを想起しながら、地主の家まで伸びた木かげの様子を読み取る。</p> <p>○言葉のリズムを楽しみながら音読することができる。</p>
8	<p>場面のうつりかわりを考えよう</p> <p>1 場面ごとの木かげの様子や登場人物たちの立場や気持ちの変化について、絵や言葉でまとめる。</p> <p>2 最後の地主の様子から、逆転した百姓と地主の関係を読みとり、この民話が親しまれている理由について考える。</p>	<p>○木かげがもたらした変化についてまとめ、その展開のおもしろさに気づくことができる。</p> <p>○民話に込められた願いについて考え、これまでに読んだ民話との共通点に気づくことができる。</p>
9	<p>好きな場面を説明しよう</p> <p>1 これまでの学習をふりかえり、好きな場面を絵と文で表現する。</p> <p>2 グループで発表し合う</p>	<p>○学習で理解できたことを明らかにしながら自分の好きな場面を描くことができる。</p> <p>○発表を通して友だちと交流し、考えを深めることができる。</p>
10	<p>いろいろな国の民話を読もう</p>	
11	<p>1 民話がつくられた国や地域を地図で確認する。</p> <p>2 世界の民話を選んで読む。</p>	<p>○世界には多くの民話があることに気づくことができる。</p> <p>○世界の民話に興味をもち、進んで読むことができる。</p>
12	<p>読んだ民話についてまとめよう</p>	
13	<p>1 図書館を利用し、民話の書かれた国やあらすじについてまとめる。</p> <p>2 好きな場面や登場人物を選び絵と文を使って表現する。</p>	<p>○本から必要な情報を抜き出し、適切な分量でまとめることができる。</p> <p>○絵や文を効果的に活用しながら分かりやすく書くことができる。</p>
14	<p>調べたことを発表しよう</p> <p>1 まとめたことについて発表する。</p> <p>2 友だちの発表を聞き、読みたいと思った本を考える。</p>	<p>○調べたことについて、分かりやすく発表することができる。</p> <p>○世界の民話に興味をもち、進んで読もうとすることができる。</p>

下線部が本単元の学び合いの活動において重点とした活動である。

③学び合いの実践

ペア学習…手立て1)

実習をした3年生の子どもたちは、普段はとても明るく活発な子ばかりである。初めて挨拶をして学級に入った時もすぐに話しかけてきてくれ、休み時間や給食の時間には、楽しそうに友達とおしゃべりをしている姿がよく見られた。しかし、授業中は少し様子が変わり、分かっているにもかかわらず手が挙げられなかった

り、自分の意見を上手く言葉に表すことができず手が止まっていたりする子どももいた。そんな様子から、普段の姿をぜひ授業でも見られるような活動を設定したいと考えた。

「木かげにごろり」の第3場面と第4場面では、登場人物の台詞や描写など、とても似た表現が使われている。8時間目で場面の移り変わりを読み取る前にこの2つの場面を比較し、同じところや違いについて考える学習を取り入れたいと考えた。その方法として、挿絵のない第3場面を文章から想像してつくり、第4場面の挿絵と比較する学習を行った。ワークシートに

広場の木と門を印刷し、紙人形の地主とおひやくしょうを準備した。子どもたちが叙述をもとにそれらを配置し、木かげを書き込むためである。この学習において、ワークシートは隣同士二人一組で完成させる。最後に黒板でそれぞれ完成した配置や書き込みを説明し、その根拠を明らかにすることによって、学級全体の読み取りとした。隣同士は、普段から班活動や給食など学校生活の中でも共に活動する機会の多い組み合わせであり、遠慮なく意見の言える存在であると考えた。このペア学習を通して、自分の意見を発表したり協力したりすることのできる力をつけ、グループ活動や学級全体での活動においても発揮できる力を少しずつ伸ばしていけるようにした。

この実践を通して、子どもたち一人一人が自分の考えを相手に伝え、協力して学習を行うことで、全員が参加できる授業づくりに生かしていけるのではないかと考えた。

<ミニシアターセット>



<子どもの作品>



グループ学習…手立て1)、2)

授業参観を通して、子どもたちは先生に一度見せ、認められている意見や感想ならば、自分から発表しやすいということが分かった。そこで、「木かげでごろり」以外にも民話を読み、そのあらすじや感想を発表するワークシートを作成した上でグループに向けて紹介する活動を取り入れたいと考えた。

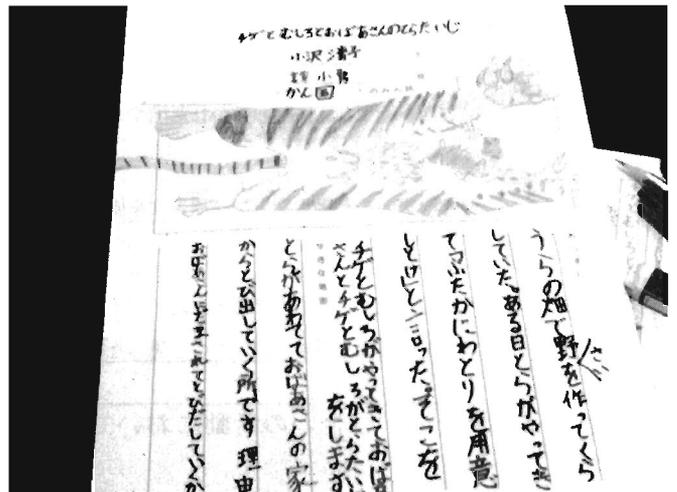
民話は全部で66冊ほど準備し、ほぼ全ての子どもたちが違う民話を選べるようにした。日本の民話が圧倒的に多かったが「木かげにごろり」が朝鮮半島に伝

わる民話であること、日本だけでなく世界各地に目を向けてこれからの読書活動に生かしてもらいたいと考え、ロシアや韓国、アフリカなどの民話を加えた。本を選ぶ際にもワークシートを準備し、読みたいと思う作品にチェックを入れるだけで済むようにした。こうすることで、限られた時間で多くの民話を手に取り選ぶことができるようにしたいと考えたためである。また、発表用ワークシートにはあらすじや好きな場面を記述したり、挿絵を描いたりする部分などに区切ることによって、自分が読んだ内容についてどのような項目を相手に伝えたら良いかということを学んでほしいと考えてつくった。

<準備した民話>



<子どもの作品・発表用ワークシート>



発表はグループで行うことによってお互いに聴き合い、必ず全員が発表できる機会を設けた。子どもたち同士が発表することによって、新たに民話に興味を持ったり、友だちがおもしろいと思う所を発見したりできるようにした。この学習を通して、今後の読書の幅を広げ、友だちとの着眼点の違いを楽しみ、意見交換の大切さやおもしろさに気づくことにつなげていきたいと考えた。

ミニシアターと同じく二人一組で、相手に自分の考えを説明し、相手の考えや思いに耳を傾ける学習であ

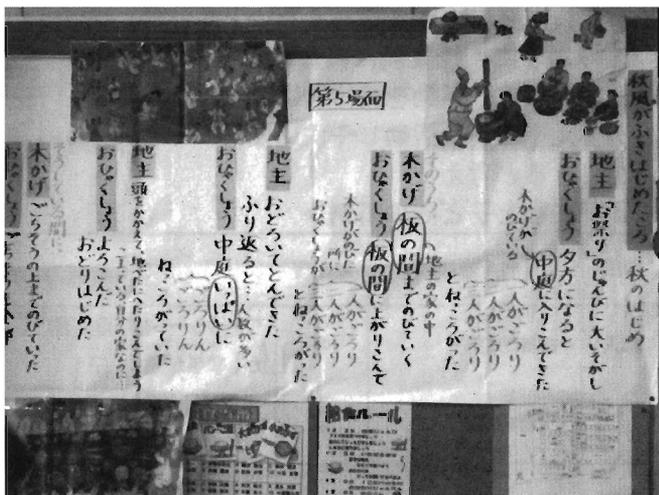
るが、自分一人でワークシートを完成させるため、なかなか取り組めない子どももいると考えたので、ワークシートを3つの項目に分け、挿絵や好きな場面など、どれかひとつでも自分の書けそうな項目を選ぶことができるようにした。このワークシートを準備することで、誰もが取り組める学習活動に生かしていけるのではないかと考えた。

板書・掲示の活用…手立て3)

<板書例>



<掲示例>



物語の各場面の読み取りに入った時間からの板書は、すべて模造紙に書いて教室内に掲示した。この実践は高嶺小においてほとんどの先生が実践されていることであり、子どもたちはこれまでの学習の過程を目視することができる。先生方が書かれたものの中にはクイズ形式になっている掲示もあり、休み時間に友達同士で楽しそうに復習クイズをしていたり、覚えていることを嬉しそうに報告してくれたりしていた。また、先生方は授業中における振り返りや、導入における復習にも活用している。この実践を、実習を通して実践してみることで、子どもたちの意欲を高める学習環境を整えることができるのではないかと考えた。

フラッシュカードや挿絵については授業で使用し

たものをそのまま貼り付けることで、多くの情報を処理することが苦手な子どもでも、一度板書として見ているものなので、一から読み直すことなく自分の欲しい情報を探ることができる。本文よりも文字数を減らしてまとめてあることで、文章を読むことが苦手な子どもでもすぐに目を通すことができるのである。また、指示が通りにくかったり、ページをめくって比較することが困難だったりする子どもでも、教室の壁を見ることでそれぞれの場面を登場人物や季節、木かげの様子などに分けて比較することができるのではないかと考え、掲示を作成した。

挿絵とフラッシュカード、板書の記述を組み合わせることによって、全ての子どもたちが内容理解を理解し、授業への意欲的な取り組みにつながっていくと考えた。

(2) 授業の考察

ペア学習では、子どもたちはおひやくしょうの人数や木かげの伸びた場所について、教科書の記述から一生懸命探して、配置や書き込みをしていた。その結果、すべてのペアがワークシートを完成させることができた。参観、指導していただいた担任の杉田先生からも全ての子どもたちが学習に参加していたと教えていただいた。学習参加を促すことでは効果があったが、子どもたちの会話を聞いていると、理解の早かった子どもが一方向的に判断をしてしまい、話し合いや協力に至らないペアも見られた。学習を始める前に、教師がペア学習の目的や話し合いの進め方について説明し、かつそれが達成されたかどうかということ、子ども同士で振り返り、評価する活動を取り入れる必要があると感じた。

グループでの発表は、実習中に行うことはできなかったが、発表用ワークシートは全員が完成させることができた。子どもの作品に目を通すと、あらすじのわかりやすさや興味をもつ場面の選び方、一生懸命描いた絵など、どのワークシートにも賞賛すべき部分があった。文字だけでなく絵での表現を入れたことで、子どもたちが取り組みやすいワークシートを作ることができたのではないかと考えている。ただ、やはりあらすじが一番難しかったらしく、下書きの段階から手が止まっている子どもも多かった。私があらすじを書くことの難しさをよく認識し、どうすれば子どもたちが書けるようになるのか、書き方をこちらが分かりやすく説明、提示する必要があったと反省している。

掲示を作って授業を進めていく中で、大変興味深いことが起こった。場面が進むにつれ、子どもたちは、おひやくしょうが「何人」ねっころがっていたのか、木かげが「どこ」まで伸びていたのか、話の中でキーワードになる言葉を自然と見つけられるようになっていったのである。板書や掲示によってこれまでの学習項目を振り返り、パターン化されたことで、子どもた

ちは、この物語を読み取る上で何に注目して読み取っていけばよいのかを学んでいけたのではないかと考えている。

2 社会科での学び合いの活動

(1) 「農家のしごと」の指導方法の工夫

写真の活用…手立て3)

高嶺小では、2年生と5年生の「総合的な学習の時間」で米づくりを体験する。昨年度のことなので、どの程度、米づくりの様子を覚えているのか尋ねてみると、5年生が主に活動するものであったようで、2年生は仕事が少ないらしく、あまり印象には残っていないようであった。ただ、学区内には水田も多く、家族や親類のつくったお米を食べている子どももいる。学区を取り巻く日常の様子を見直し、農家の仕事が身近でない子どもにも、全員が農家の仕事について具体的なイメージをもって学習に取り組めるようにしたいと考え、写真を教材として活用することにした。また、より分かりやすく伝えるために、写真は全てカラー印刷やカラーコピーを使用した。教科書、テレビ、雑誌など、子どもは普段からカラー写真を見慣れており、白黒であると実際の物を想像しづらいつけられる。また、実った稲の色や脱穀、精米後の米の違いに気づけるようにしたいと考えたためである。

よって、ワークシートや板書において実際の写真を活用しながら授業を進めることで、内容を分かりやすく伝えることに生かしていけるのではないかと考えた。

板書とワークシートの一致…手立て2)

ワークシートを書けない子どもの様子を見てみると、どこに何を書けば良いか分からない、表を書いたり構成を考えながら板書を写したりしていくことが難しい様子だった。そこで、サポーター実習で行っていた取り出し指導において、ワークシートに枠やかっこを書き加えると、すぐに取り組むことができたことに学んで、子どもが書くべき場所や見本を提示して取り組ませることにし、全体指導でもこうしたワークシートを準備し、授業をしたいと考えた。

また、本単元では「田うえ」や「いねかり」など、農作業に関連する用語がとて多く、米づくりカレンダーの作成など、項目を書き込む場所などもとても重要になる。全ての子どもがワークシートを正しく記述し、授業後も資料として活用できるようにするためには、板書計画に沿ったワークシートを作成する必要があると考えた。板書とワークシートに使う写真やかっこの位置なども同じにすることで、板書から書き写す範囲や場所を正しく理解できるようにした。

このように、板書とワークシートをほとんど同じようにそろえることによって、全員が学習に取り組み、自分の学びの軌跡を目視することができるのではない

かと考えた。

シナリオの作成…手立て2)

授業を参観したり、実習中に自分で授業をしたりしていると、良い意見を持っているにも関わらず、失敗への恐れや恥ずかしさから挙手できず、全体やグループでのやりとりに参加できないまま過ごしてしまう子どもたちがいた。「良いことが書いてあるね」「発表してみたら」そんな声かけもしてみたが、全員の前で挙手をしたり、教室中に響く声で発表したりすることは難しいようだった。それを繰り返していくうちに、挙手をして発表するメンバーがどんどん限られていき、授業そのものに活気がなくなってしまうことも感じた。こうした状況を改善し、子どもたち全員を学習に参加させたいと思った。

そこで考えたことが、それぞれの子どもの理解の段階に応じた質問を考え、発問に加えていくことである。もちろん子どもたちには、全体の前で活発に挙手したり、意見を発表したりできる子になってほしいと思っている。しかし、成長途中である現段階でも参加できる授業にするためには、今できることを探し、そこから活躍の場を設定していくことが必要であると考えた。一律な発問から考えるのではなく、活躍の場が少ない子どもたちを対象とした質問内容を考え実践することで、全員に発表の機会を与えたいと思った。

このように、授業前に具体的な発問や指示を考え、子どもの反応や活動を具体的に想定することで、子どもが答えやすい、活動しやすい授業づくりに生かすことができると考えた。

<質問内容と子どもの事例>

段階	質問内容・活動	難易度	主な対象
導入	・前時の確認 ・予習内容	中	ワークシートを丁寧に書けるが、挙手が難しい子 指示は聞けるが、自分の意見に自信が持てない子
		低	
展開	・考えや意見 ・話し合ったこと	中～高	挙手して自分の意見が言える子 自分で意見をまとめるのが難しいが、発表のできる子
		低～中	
まとめ	・全体のまとめ ・疑問、感想(記述)	高	めあてを振り返り、意見を分かりやすく述べるができる子 全員ができる活動
		低～高	

(2) 「農家のしごと」の実践

①写真の活用

「農家のしごと」の学習では、稲の生長や農作業だけでなく工場における加工や出荷の様子についても学

ぶ。特に愛知県には安城市に日本有数の精米工場があり、豊田市でつくられたお米もここに運ばれ、もみすりや精米などを経て再び豊田市や名古屋市などに出荷されている。また、JAは、地域のスーパーマーケットやガソリンスタンドなど、様々な面で子どもたちと家族の生活を支えている。こうした子どもたちと地域の生活に結びついたJAなどを学習することで、愛知らしさをぜひ学んでほしいと思った。さらに、施設やお米のパッケージなどは全て愛知県のものを活用した。施設や銘柄などの名前は知らなくとも見たことがある、利用したことがあるということを感じさせやすくするためでもある。この学習を通して、子どもたちが日頃から目にしている、利用しているものが学習対象となることで、自分たちの身の回りについて、興味や関心をもって見直すきっかけにしたいと考えた。

<ワークシート>

とれたお米のゆくえ

名前 _____

(カントリーエレベーター) → (せい米工場) → (スーパーへ)
 かんそう、もみすり せい米、ほうそう とよた、なごやなど

JAについて

(Aコープ)

(ガソリンスタンド)

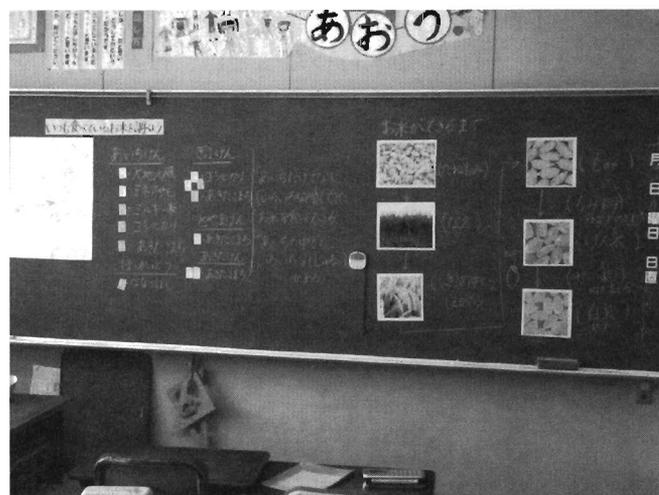
(グリーンセンター)

②板書とワークシートの一致

まず教科書や副読本『とよた』を参考にしながらワークシートをつくり、活用した写真を拡大して印刷することで、素材を統一した。授業する前の放課後などに実際に配置を確認し、ワークシートと一致させるための配置や子どもの意見を書き込むスペースを確認した。この作業は、自分が授業を進める時の練習になり、また、この時の写真を指導案に添付し先生に提出したことで、授業内容をより具体的に伝えることができた

と考えている。

<板書>



<ワークシート>

いつも食べているお米を調べよう

名前 _____

いつも食べているお米は

(_____) でつくられた

(_____) というしゅい

お米ができるまで

(_____) の中からほがでる

(_____) (_____) (_____) (_____)

授業中でも配置に気をつけながらフラッシュカードを貼っていき、授業の最後には板書とワークシートがほぼ同じになっているように進めることで、子どもたちに学習内容が伝わり、理解がしやすいようにした。また、実習をさせていただいた子どもたちは3年生なので、キーワードをひとつ書くのにもとても時間がかかり、聞きながらメモを取ったりすることも難しそうだった。そのため、書く時間と話をきく時間は教師の声かけや指示によってしっかり分け、子どもたちが

書く場所や言葉に集中できるようにすることで、じっくり考える時間を確保できるようにした。

③シナリオの作成

授業をする前日に必ず行ったことは、授業の流れを計画したシナリオをつくることである。教師力向上実習Ⅰでは、実践した授業での指示が子どもたちに上手く伝わらず、自分の発する言葉を事前によく吟味しておこうと考えたことがきっかけだった。自分の発問や説明を台詞のように書き、授業を進める時の具体的なイメージを描いていくことで、子どもに分かりやすい言葉で語りかけることができるのではないかと考えていた。

教師力向上実習Ⅱで授業をするにつれ、子どもの反応を発問や説明の後に書き込んだり、誰に答えてもらうかといった対象を考えながら発問を考えたりすることが大切であることに気づき、シナリオに加えた。それを繰り返していくうちに、前時の授業で発言の無かった子どもがいた時は答えられそうな質問を取り入れたり、ワークシートでよい記述があった際はそれをどの場面で紹介すべきか考えたりすることで、子どもたちの様子を具体的に思い浮かべることができた。

(2) 授業の考察

写真を活用したことによって、授業中には子どもたちから「見たことがある」「コンバインだ」などと、内容についてのつぶやきが多く発せられた。動画などで実際の作業の様子なども伝えられると、より農家の仕事について具体的なイメージが湧いたのではないかと考えた。これは今後の課題である。写真を使ったことで、子どもたちは私が問いかける前に機械やビニールハウスなどの施設に着目し、気づいたことを発表してくれた。また、授業の最後に書いた振り返りのカードには、授業内容だけでなく、もっと知りたい、興味を持ったことなどが多く書かれていた。例えば農作業における機械化の授業では「機械は他にどんなものがあるのか」「全部で何種類くらいあるのか」などという質問が多く寄せられた。子どもたちが当然興味をもつであろうことを予測できなかったことについては反省しているが、提示されていないことにも目を向けられる子どもたちはとてもすばらしいと思った。こうしたところに今後の追究の課題もあるが、授業内容を理解できたからこそ出てくる言葉であると考えている。

ワークシートは毎回授業後に回収し、全員の記述をチェックした。かつこの中には全員の子どもの記述ができていたので、書きこむ場所を明確にできたのは効果があったと考えている。また、ワークシートは授業の序盤で配布することが多かったため、書き込む前のワークシートを見ると、授業の流れの概要が教師に分かる。私自身もワークシートを配布した後で授業の流れについて説明することが多かった。さらに、子どもたちは、自分で書き込むにつれて授業における

学習の段階を理解することができる。そうした意味でも、ワークシートを配布することが、子どもたちが見通しをもって学習に取り組み、授業に集中することに効果があったと考えている。

授業のシナリオの活用では、私自身の変化であるが、ほとんどシナリオを書かなかった時と比較すると、授業を始める前の緊張が少し薄れ、予想外の出来事や展開にも対応しやすくなった。授業中には指導案と共に教卓の上に置いておくものの、特に見ることはなかった。それでも、緊張したらすぐにシナリオを見ればよいと思うことで、余裕をもって授業をすることができた。余裕をもって授業をすると、子どもの表情や反応に集中することができ、一人一人と視線を合わせながら授業をすることができた。そうすると、自然と子どもの視線も教師に集まり、自然と私の発問や説明に対する反応や発言も増えてくる。そうした子どもの反応や意見を反映させ、発問や活動を少しずつ変えていけたのも、シナリオという枠組みをアレンジすればよいという安心感があったためであった。教師が余裕を持って授業に臨むことが、子どもたち一人一人に目を向けた授業に効果があることを学ぶことができた。

IV 実践の考察と課題

1 子どもの変化

(1) 授業中の取り組みから

①ペア学習の様子から

実習中、高嶺小の先生方がなさっているように、授業中の発言は板書とともに名前が書かれた磁石を貼っていった。完成した板書を見ると、子どもたちが自分たちの力で学んだことを目視することができ、意欲を育てることに繋がると考えている。しかし、発言の機会がないために毎回必ず黒板に貼られず、保管しているホワイトボードに残ったまま授業が終わってしまう子どもも4、5人いた。

しかし、ペア学習やグループ学習をする中で、そんな子どもたちを含めた全員が、ワークシートを仕上げたり発表をしたりと、自分の役割を理解し、授業に参加していた。学級の前ではなかなか声の出せない子どもでも「木かげは門まできっちりのびていた」などと教科書の記述を探し、普段どおりの声の大きさを隣の子どもに自分の考えを発表していた。

このように、学級全体の前ではなかなか意見が言えなくとも、グループ内ではほとんどの子どもたちが普段通りの声量で発言している様子から、ペアやグループ内での発言や発表の場を設けることは、子どもたち一人一人が自分の考えや思いを相手に伝えることに効果があることが分かった。少人数での活動を通して、徐々に全員が学級全体の前でも自信をもって発表できるように繋げる実践も考えていきたい。

②ワークシートの記述から

授業の進め方が大変優れていても、子どもたちの中には、積極的に取り組めない様子が見られる子もいた。書くべきものが書けなかったり、構成を考えながら板書を写せなかったりすることで、本時の授業の理解だけでなく、前時の学習を振り返ることもできず、分からないことが蓄積しているように見えた。ワークシートは、子どもたち全員が学習に参加できることを目指した。

子どもたちから集めたワークシートを見ると、ノートが書けなかった子どもでもしっかりワークシートに書き込むことができていた。かっこを設け、書く場所を指定することで、全員がワークシートを書き、学習に参加する環境をつくることができたと考える。中には私が説明した内容をメモしている子どももいて、余白の大切さも学ぶことができた。

(2) 授業時間以外の様子から

授業前、私はいつもフラッシュカードを入れる箱を持って教卓に置いておく。授業を重ねるにつれ、子どもたちが始まる前から「今日はどんなものを使うのか」「フラッシュカードを貼りたい」などと、学習内容や指導方法に興味を持ってくれたのはとても嬉しかった。また、板書をまとめた掲示も好評で、授業前に貼っておくことで子どもたちが見にやってくる。「これ私書いた紙だ」「もみすりって何だっけ」などと自然と学習内容の会話が出てきた。授業内での教師の説明や学習活動を工夫することもとても大切だが、こうした形に残る具体物を置いておくことで、子どもの振り返りやより知りたいという意欲を伸ばすことができたのではないかと考えている。

掲示物や写真、フラッシュカードなど、子どもたちが興味を示すものを準備しておくことで、授業内容や学習方法にも興味をもつことに効果があると考えた。

(3) まとめ

以上の実践を通して、

- ・少人数で発言や発表を取り入れる学習活動
- ・絵や言葉など、子どもの視点で伝える学習内容
- ・子どもが自主的に振り返りをするための掲示やワークシートの作成

この3つが、全員が参加できる授業づくりのために重要であることを学んだ。参加が難しい児童が何に困難を抱えているのか、逆にどんな活動ならば参加することができるのかをさらに考えていきたい。

2 今後の課題

(1) 自主性を育てる

ペア学習、グループ学習を通して、確かに子どもたちは授業に参加することができた。しかし、自主的に参加したわけではないと考えている。特にペア学習はどちらか一方が参加できなければ一人で行うことになるため、もし一方にやらない子がいたら成立しない。また、学年が上がるになるにしたがって「やらない」

という言葉に対し「じゃあ一人でやる」という反応も出てくることだろう。そうならないためには、魅力的で、かつ二人でなければできない学習内容で活動を設定する必要がある。

魅力的な活動のためには、子どもたちがここでできない活動であると認識してもらうことがとても重要であると考えている。そのため今回の実践では、教科書の挿絵をカラー印刷した紙人形を使用した。これは子どもたちが初めて手にするものであり、動かしたり配置したりすることで楽しく活動し、読み取りの苦手な子どもも意欲的に参加することをねらいとした。こうした活動を単元の中で一、二つ考え、実践していくことが自主的な参加を促すと考えている。

二人でなければできない活動のためには、役割を教師がしっかり設定したうえで活動の説明をする必要がある。加えて、協力することや学び合うことの大切さを子どもたちに分かりやすく伝え、振り返りも含めた構成を考えていく必要がある。また、何時間か、かけてペアやグループの学習を行う際には、それぞれに目標をたてたり、ルールを決めたりできる活動を設けることも効果的ではないかと考えている。

(2) ノートを使った学習への対応

今回ワークシートの活用を通して、子どもたちは板書を写したり書き込みをもとに発言したりすることができ、多くの学習活動に参加することができた。しかし、やはり自分の力でノートに板書を写すことも大切な勉強であるし、中学、高校に進学することを考えると、復習しやすいノートをつくれる力はとても重要である。よって、ノートを使った学習においても同じように学習に参加できる力を育てていくためには、板書とノートを対応させることや部分的なノートの活用を考えている。

実習においてワークシートを板書と対応させたようにノートに合わせた板書を計画する。そのためには、子どものもつノートの字数や行数などを考え、改行やスペースなどを合わせて書いていくことで、写しやすい板書になるのではないかと考えている。

また、いきなり全てノートだけを使わず、見開きのノートに半分ワークシートを貼り付け、残りの半分を直接ノートに書き込む方法もある。初めはノートを書くスペースを少なくし、徐々に増やしていくのである。そうすることで、ノートを書くことへの抵抗感を減らし、慣れることができるのではないかと考えている。そしていずれの方法にも、教師が必ず集めて子どもたちの学びの様子を読み取ること、朱書きを入れて次時への意欲を育てていくことが大切である。

(3) 授業記録と改善への手立て

シナリオづくりにおいてさらに改良を加えるならば、声量や調子を考えること、振り返りの記録をつけることである。実習でお世話になった先生方の授業で、

先生方は声の調子を変えたりわざと小さい声を出したりして、子どもの集中を持続させていた。先ほどまで教室中に響く声で説明してくれた先生が、急に小さな声で話していく。すると、ほとんど聞いていなかった子どもでも「どうしたんだろう」と身を乗り出して聞く姿勢になったのである。子どもは好奇心が旺盛であり、ちょっとした変化にすぐ反応することができるということを学ぶと共に、すばらしい技術であると思った。どんなに楽しく学べる活動を計画しても、まず教師の指示や説明に子どもたちが耳を傾けなければ、まるで意味をなさなくなってしまう。意図的に声のかけ方や調子を場面によって使い分けながら、全員が聞きたくするような発問や説明ができるような方法を実践したい。また、すぐに子どもが反応できた発問や効果的だった声かけ、逆に伝わりにくかった指示について細かく記録をとり、改善点を考えることも必要であったと思った。計画と実践、記録や振り返りを繰り返すことで、自分の発問や指示のバリエーションを増やし、何より子どもたちの実態をつかむことができたのではないかと考えた。これからは、自分の参考書にできるようなシナリオづくりを実践していきたい。

(4) 小学校実習で学んだことを生かして

ワークシートや板書、ペアやグループなどでの学び合いの学習は、小学生が対象ということで、どれもきめ細かさを重視した実践だった。しかし、子どもたちが中学校に進学することを考えると、これらを続けていくことが必ずしも有効であるとは限らない。授業のほとんどを担当が行う小学校と、教科担任制により複数の教師による指導が行われる中学校では、子どもたちに指導できる時間が違う。そんな中で、中1ギャップと問題にされるように、子どもたちが小学校と中学校との差異でつまづくことのないよう、中学校においても、その発達段階に応じた指導が求められる。教師としても、教科担任制という限られた時間の中で、子どもたちにどのような指導方法が効果的であるのか考えたい。

中学生の子どもたちには、こちらが細かく確認をするより、自らで考え学ぶ力をつけてもらいたい。そのために、グループ学習やノートの取り方などは「手引き」を準備し、配布することが有効ではないかと考えている。与えられたものを理解し、活動していく中で協力が生まれ、学び合う環境づくりができるのではないだろうか。「手引き」は学年ごとに段階を進め、より高度な活動にしていきたい。また、実践と同じく板書とノートを一致させて計画をたてることは、定期テストや入学試験を経験する中学生にとって、小学生以上に重視すべき指導であると考えている。

中学校は、一週間のうち数時間しか指導できなくとも、三年かけて指導できる可能性がある。より長期的な計画をたて、実践したいと考える。

【参考文献】

《学習や心理学に関して》

エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト『人を伸ばすカー内発と自律のすすめ』（新曜社、1999）

市川伸一『学ぶ意欲の心理学』（PHP 研究所、2001）

市川伸一『学習と教育の心理学』（岩波書店、1995）

宮本美沙子・奈須正裕『達成動機の理論と展開』（金子書房、1995）

奈須正裕『学ぶ意欲を育てる—子どもが生きる学校づくり』（金子書房、1996）

中谷素之『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり』（金子書房、2007）

佐伯胖、藤田英典、佐藤学『学び合う共同体』（東京大学出版会、1996）

櫻井茂男『自ら学ぶ意欲の心理学』（有斐閣、2009）

阿部和彦『子どもの心と問題行動』（日本評論社、1997）

斎藤久子『学習障害—発達の・精神医学的・教育的アプローチ』（ブレーン出版、2000）

文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』（東洋館出版社、2008）

《国語科での実践に関して》

岩辺泰吏『はじめてのアニメーション—1冊の本が宝島—』（柏書房、2003）

モンセラット・サルト『読書で遊ぼうアニメーション』（柏書房、1997）

M.M.サルト『読書へのアニメーション』（柏書房、2001）

大越和孝『「昔話、神話・伝承」の指導のアイデア30選』（東洋館出版社、2009）

西郷竹彦『民話の教材分析と授業』（明治図書出版、1969）

中嶋公喜、加藤八郎『学習意欲を引き出す教室環境・教室壁面中学年』（明治図書出版、1998）

寺井正憲『小学校教育課程講座 国語』（株式会社ぎょうせい、2008）

文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（東洋館出版社、2008）

《社会科での実践に関して》

白川けいこ『米づくり・30の謎を追え』（明治図書出版、1994）

浦城晋一『日本農民の変換過程—経済成長の農家・農業・農村への影響分』（御茶の水書房、1978）

磯辺俊彦『日本の農家 農業統計の現代的課題』（農林統計協会、1979）

農林水産省HP—子どものための農業教室

http://www.maff.go.jp/j/agri_school/index.html

JAあいちHP

<http://www.ja-aichi.or.jp/top/index.html>

北俊夫『小学校教育課程講座 社会』（株式会社ぎょうせい、2009）

文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』（東洋館出版社、2008）